
徘徊

ねぎポン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徘徊

【Nコード】

N1955B

【作者名】

ねぎポン

【あらすじ】

8月11日。夜の校舎で放送部員が出会った“ある少女”の過去とは？

Vol. 1 (前書き)

『“異”・日常的風景』に続く、雑文小説第2作目。今回も先の読めないハラハラドキドキのストーリー展開が続きます（予定）。

実はこの作品には原作が存在します。それは2005年の文化祭で自分の所属する放送部が上映した同名の

「ホラー映画」

です。1作目との調整の為に、会話や設定に原作との多少の差異はありますが、一応原作に忠実に書いたつもりです。

内容に飽きずに最後まで読んでいただければ、これに勝るものはありません。

8月11日。あの日は“彼女”に出会った――

11時56分、2年A組教室。長田希代実と春川結花は窓側の前後席を向き合わせ、夏休みの宿題を教え合っていた。

「ああ。もう宿題なんかやってらんないよ」

長田はシャープペンを投げ遣りに机へと放った。春川もそれに同調する。

「ホント。もう無くなっちゃえばいいのに」

少しの沈黙の後、長田が突然話を切り出した。「あ、そうそう。これ友達が言ってた話なんだけど、……見たんだって」

長田の口調がおどろおどろしくなる。

「え？何を？」

「幽霊」

「うそぉ？！ありえないよ」

春川が派手に驚く。

「ホントホント。なんか夏の11日になると、黒い布で身を隠した、刀を持った幽霊が出るんだって……」

「それって今日じゃない？」

「……もしかしたら出ちゃったりして……」

「ちよっと待ってよ……！」
明るく振る舞う春川だが、その内心ではかなり怯えている。

「大丈夫だって！」

そんな春川を長田が慰める。長田は話題を転換した。

「ねえ、もうすぐ12時だし、お昼にしない？」

「そうだね。どこにする？」

「放送室がいいよ。あそこなら扇風機もあるし」

「賛成！でも開いてる？」

「大丈夫！きつと開いてるよ！」

2人は宿題と筆記用具をまとめ始めた。

放送室。ここは羽生南高放送部の活動拠点である。新年度となり1年生が6名入部し、2年生が2名入部した。しかし約1名、たかの・こうへい高野康平が部の雰囲気になじめなかったのか退部、総部員数は14となった。おりへ・とある顧問も替わった。織部徹先生は異動し、おとらはら・ひでのり副顧問だった乙原英則先生が昇進。環境の大きく変化した中で、南高放送部は新たな船出をしたのであった。

その頃、校内図書館（図書室）にはふじもと・こうき藤本光喜と小池咲の2人が入館していた。2人は生徒会執行部所属の2年生と1年生だが、放送部員でもある。

「やっぱり図書館は涼しいなあ〜」

「ちゃんと静かにしてて下さいよ」

桃色の扇子を扇がせながらだれる藤本へ、小池の釘が飛んだ。図書館は生徒にとって憩いの場。冷暖房完備で常に温度が一定に保たれている。

「じゃ、私本借りて来ます」

小池はそう言って館内の奥へ。藤本はふらふらしながら進行先にある椅子へ向かって歩き、腰掛け、目の前の机に思いつ切り突っ伏した。そして何の気も無しにただ視線を右へと滑らせていく。すると、その先に1冊の赤い古びた本が。藤本の右手が伸び、それを引き寄せる。結構厚目の本だ。藤本はその本のページをゆっくりゆつくりとめくっていった……。そして何の気も無しにただ視線を右へと滑らせていく。すると、その先に1冊の赤い古びた本が。藤本の右手が伸び、それを引き寄せる。結構厚目の本だ。藤本はその本のページをゆっくりゆつくりとめくっていった……。

「……………」

藤本はその内容に全神経を集中させていた。そしてそれが徐々に核心へと迫っていく。次の1枚をめくると心臓部だろう。そう思いながら核心のページを開く……。その瞬間だった。左肩を柔らかく叩くものがある。藤本の前かがみになっていた上体が反射的に跳び上がった。上体をひねらせるようにして振り返る。

「行きますよ」

視線の先には小池の姿があった。藤本は胸を撫で下ろし、2人は図書館を後とした。そこに1冊の古びた本を残して……。

15時。進路資料を両手に携えながら校舎2階を歩く1人の男子生徒がいた。ラバーの黄色い上履きを履いた1年生。青田公彦。あおた・きみひこ高校生にしては小柄な体格、あどけない顔。一見して中学生を思わせる。放送室へと差し掛かった時、青田はその足を止めた。

「あ、乙原先生」

放送室には乙原と勉強道具を散乱させたままやすやすと眠っている長田と春川がいた。

「どうしたんですか？」

青田が室内に入り、乙原に訊ねる。青田も放送部の一員だ。

「うん、ちよつとねえ」。これ地学部の忘れ物らしいんだ。地学室開いてないからしばらくここに置いておくね」

乙原独特のねつとりとした喋り。出身が栃木県だからだろうか？青田は放送室の前方右隅の机に置かれている赤い年季の入った柄付きの鏡にさっと目を通すと、曖昧な返事をし、放送室を去って行った。

19時半。夏とはいえ、辺りはもう暗くなってきた。その後も放送室で眠りふけていた2人はさすがに目を覚まし、帰宅しようとして昇降口までやって来た。長田はA組、春川はH組。互いの下駄

箱の間隔がかなり離れている。

「結花、もう真っ暗じゃない？」

「ねえ。早く帰ろ」

靴を履き、春川がドアノブを押す。しかしドアはびくとしかなかった。引いてもみたが、駄目だった。焦った春川は何度もドアを開けようとする。しかし鍵が掛かっているらしく、ドアは一向に開く気配を見せなかった。

「あれ？開かない……」

「ええ？」

そこへやって来た長田。他の扉にもやはり鍵が掛かっていた。春川が開けようとしたドアは他のものと違い、大抵は開くようになっている。いざという時の頼みの綱なのだ。他の扉は押す所が平べったくなっているが、このドアだけはなぜかノブ型。しかも少し小さ目だ。

「鍵取りに行くの面倒臭くない？」

長田が脱力気味に言う。

「うん……」

「事務室の所は？」

「開いてない開いてない」

「どうしよう……」

困り果てる2人。そこへ青田が通り掛かった。

「あ、先輩達どうしたんですか？」

「あおちー！鍵が閉まっちゃったみたいなんだけど、職員室まで鍵取りに行ってくれる？」

渡りに船。春川は青田に懇願した。

「え？俺がですか？」

「早く行くッ！！」

痺れを切らした長田が怒鳴る。青田は長田に追い出されるようにして職員室へと駆け出して行った。

青田が職員室に着いた時、室内には誰一人として人影は見当たらず

なかった。しかしなぜか電気だけはついている。

「あれっ？誰もいないのかな？」

青田は職員室に入るとぐるりと辺りを見回した。職員机を風漬ふうみしに見て回る。その後、入口の扉の小窓から発する、赤い浴衣を着た少女の視線を感じる事も無く……。

青田が鍵を取りに行っている間、昇降口に取り残された2人は青田を待ち続けていた。

「あおちー遅いね。どしたんだろ？」

「うん、ホントだよね」

春川と長田の会話。その時、西階段の方から足音がしてきた。2人がその方向へと振り向く。すると、それまでしていた足音がぴたりと止んでしまった。

「気のせい……かな？」

「……………」

春川は黙ってしまった。強がりをし、春川を慰める長田。しかしその後、長田は背筋の凍る思いをする事となる。

「キャッー!!」

後方から右肩を叩かれた。とっさに振り返る長田とつられて振り返る春川。

「何やってんの？」

肩を叩いたのは藤本だった。その後ろには小池もいる。

「ちよつとびつくりさせないでよ……」

それは長田の本音だった。

「ゴメンゴメン」

藤本が笑って平謝りをする。

「そっちこそどうしたの？」

春川が訊ねる。

「生徒会の仕事だよ」

小池と同様藤本の後ろに付いていた栗田佑介あわた・ゆうすけが答えた。彼もまた生徒会執行部員である。長田がこれまでの経緯を説明する。春川がそれに言葉を添えた。

「あおちーが鍵を取りに行つてから、まだ歸つて来ないんだけど……」

「じゃ、俺等で見に来るか？」

栗田にそう言うなり、藤本は職員室へと向かつて歩き出した。栗田がそれに付いて行く。2人は階段を上り歩いた。室内は真つ暗だった。

「何か電気点いてなくね？」

異変に気が付いた栗田が歩きながら言った。

「ああ……」

芯の無い返事。藤本の顔は真剣だった。扉を開け、中の電気を点ける。3、4歩足を踏み込んだ藤本と背後の栗田。しかしそこに青田の姿は無かった。電気を消さないまま職員室を後とする。

「いやあ、でも暗くなっちゃったね」

「あおちー置いて帰ろうよ」

そんな会話を交わしながら、2人は西階段へと戻つて来た。すると上の階で何か物音が。弱気になっていた栗田はびびってしまい、その場で全身が硬直してしまった。しかし藤本はそんな事には全く動じない。

「何だ。上にいんじゃない」

藤本はそう言うと共に階段を上り始めた。その後を栗田が慌てて追う。

その頃昇降口では残された女子3人がぐったりとしていた。

「ていうか2人も遅いんだけど？」

長田はもう待ち切れないといった様子だ。

「携帯も通じませんしねえ」

小池が携帯のディスプレイを見ながら言う。長田は1つ大きな溜息を吐いた。

「上に行ってみますかあ？」

小池。

「全く役に立たないねえ」

3人は重い腰を上げ、男子の後を追った。

「失礼しまーす……あれ？誰もいませんよ？」

職員室へとやって来た3人。しかし彼女達が見たものは既にもぬけの殻と化していた職員室内だった。

「ええ〜?」

「鍵も判んないしねえ〜」

長田と春川が不平を言う。

「入ってみますか?」

「うん……」

気の無い返事をする2人。3人は長田を先頭に職員室へと入って行った。長田の指示の下、1人1人が分かれて鍵を探して行く。しかし、どこを探しても鍵は見つからなかった。

「事務室とかは?」

3人が再びドアの前へと集結しながら長田が言った。

「誰かいますかねえ」

小池。

「とりあえず行ってみよっか。咲ちゃんはバカ共を連れて来て。すぐ上にいると思うから」

春川はそのような台詞をぬけぬけと言う。これが彼女の本性なのだろうか?

「わかりましたあ」

そう言う小池の顔には笑みがあつた。

小池が西階段を1階分上り切った時、その階で青田を搜索していた藤本と、バツタリ遭遇してしまった。

「わあッ!」

「どしたの?」

「もう、びっくりさせないで下さいよ……」

「佑介知らない?」

「え?見てませんよ?」

「実は佑介とはぐれちゃってさ……」

「どうするんですか?」

「うん……。まあ帰ったとは思えないしねえ」

自分の仲間がはぐれてしまったというのに、藤本の表情はいつもとあまり変わらない。ペースは緩やかだった。3階での“栗田捜し”に小池も加わる。

藤本とはぐれてしまった栗田。彼は4階の西側にいた。

「光喜どこ行っちゃったんだよぉ……」

そう言うなり、栗田は猪のように一目散に走り出した。西側から東側へ。

廊下の突き当たりにぶつかり、Uターンしたかと思うと、今度は90度右に折れ、さらにその先の突き当たりにぶつかった。栗田の勢力はそこで尽きた。正面の壁に右手を当て、荒れた呼吸を整える。すると、そこへ背後から鈴の音が。しかもその陰には赤い浴衣を着た少女が立っている。全てが恐ろしくなってしまった栗田は完全に拳動不審状態と化し、体を丸ごと後ろへと向ける。しかし、そこには誰もいない。

——幻聴か——

溜息を吐き、再び体を前へと向けた。その時、
「うわあああああ!!」

栗田の目の前には、その赤い浴衣を着た少女本人が立っていた。栗田の悲鳴は校舎中に響き渡った。

小池と別れて行動していた長田と春川は、それを事務室の前で耳にした。余談だが、事務室は去年9月に長田が西崎勝にしき まさかつによって監禁されていた部屋でもあり、長田にとっては思い出の部屋である。

「何？今の」

長田が思わず発する。恐怖はみるみる増幅し、2人はパニック状態となってしまうた。

「早く帰ろうよ!」

「でも鍵無いと……」

「どうする？ここも誰もいないし……。私達も上行く？」

「うん……」

春川の同意のもと、2人は小池の向かった西階段へと廊下を歩く。すると、その目の前で一瞬人影が通り抜けた。

「あ、バカ一匹発見！」

「何してんだろお」

そう言うが早い。春川は人影の通り抜けた辺りへと早足で向かって行った。

しかし、そこにいたのは先を行った男子では決してなく、身体を黒い布で覆われた、謎の男(?)だったのだ。

2人の気配に気付いたのか、男は顔をゆつくりと2人の方へと向け、立ち上がる。

布の達していない顔には包帯が一面にぐるぐると巻かれており、人相や表情をうかがい知る事はできない。

凍り付く2人。

しかも男の右手には刀が。

その手にも包帯が巻かれている。

身長はそれ程高くない。

男が2人との距離を一気に詰め、力を大きく振りかぶる。

そこで2人は我に返った。

反射的に身体を翻し、彼の手から逃れようとする。

しかし、身体が思うように動かない。必死で逃げる2人。追う男。

無我夢中だった。スローモーションで展開される世界の中を、長田と春川が悲鳴を上げながら全速力で駆け抜ける。そしていつの間にか辿り着いていた東階段で藤本と小池と鉢合わせ、さらに事態は大混乱。4人はとにかく校舎内を爆走し、男を振り切って行った。

4人は最終的に図書館へと避難した。図書館の鍵はなぜか施錠されていなかった。電気も点いている。藤本、長田、春川はドアを入ってすぐの背もたれの無い小さな正方形のソファアの4脚集まった所へと突っ込み、小池は入ってすぐ左側のカウンターの机に寄り掛かった。長田が藤本に言う。

「何なの？あれ……」

「俺が知るかよ……」

「……同じだ……」

「何が？」

春川の突然の告白に、藤本は反応した。

「今日ながたんと話してた話と……」

「どんな話なんですか？」

小池も耳を傾ける。

「夏の11日に学校に“出る”って話……」

話の言い出しっぺである長田は、背筋を凍らせている。

「黒い布で身を隠した、力を持った幽霊が……」

「そっちも何か見たんですか？」

春川の力に乏しい声、図書館の重苦しい雰囲気、聞き覚えのある少年の声が遮った。

「誰?!」

小池が機敏に反応する。

「俺です、俺」

声の主は青田だった。4人の許へと歩く青田。

「あおちー！もう、どこ行ってたのよ?!」

長田が嘆く。

「すいません。逃げてて……、隠れる為にここにいたんです……。佑介先輩もいますよ」

「光喜い」

栗田が今にも泣き出しそうな声で近付いて来る。青田はこれまでの経緯を低く小さな声で藤本達に話している。

「で、その赤い浴衣の娘の話は？」

長田は栗田を無視し、青田の体験談を聴いている。

「職員室で背筋に寒気と視線を感じて振り向いたら……腕を捕ま
れて……」

そう言つて、青田は隠していた左腕を前に出した。そこには手の形をした青あざのようなものができていた。絶句する藤本達。

「……それで逃げて来たんです」

「佑介は？」

藤本は話題を切り返す。

「¥ ∞ ? @ ~ ♪ ケ * % ……」

栗田は動転している。5人は栗田を放置した。

「もう帰りたいよ……」

長田が嘆く。と、そこで藤本は気が付いた。ソファから立ち上がり、歩いて行く。その先にはあの本があった。改めてその本のペー지를繰っていく。どうやらこれは日記のようだ。それにはこう書かれている。

昭和61年9月11日

私は10才になった。今日から日記をつけようと思う。

その日以降、日記には毎日の事が丁寧につづられていた。しかしある日を境にその内容に変化が現れ始める。どうやらこの少女はいじめに遭っていたようだ。そして、その翌年の11日――。お気に入りの手鏡を隠された彼女は行き場を失い、ついにその手で自らの短い生涯を閉じてしまう……。

「何でこんなのがここにあるんだよ……」

しかも、この日記には彼女が自殺した事までもが克明に記されて

いる。そして藤本はそのページを試しにめくり、さらに青ざめた。そこにはその後の出来事が年ごとに延々と追加されていたのだ。年こそ異なるものの、同じ日付、それも昭和の年号で。彼女は20年近くの歳月が経過した今も尚、あの日が来ると手鏡を探しにやって来る。今日の事も既に追加されていた。

鏡が近くにあると思うんだけど、まだ見つからないの……。知らない人が6人。いじめに来たの……？

「これ読んでみ」

藤本はこの日記を青田に手渡した。

「これって!!」

青田が思わず顔を上げる。その時、図書館のドアが乱暴に叩かれた。臨時避難所の安全は一瞬にして奪われた。

「ここって安全なの？」

ここに来て初めて栗田に口を利く長田。

「しっ、知らねえよっ！」

栗田のみならず、この館内の人間の精神は完全に動転していた。

しかし、その中で平静を必死で保とうとしていた青田は、皆に、そして自分に言い聞かせるようにして、こう言い放った。

「裏から逃げましょう！」

図書館の裏口目がけて青田を先頭に猛然と突っ込む藤本達。その遙か後方ではドアを叩き続ける音が虚しく響いていた。

裏口から脱出した6人はすぐその東階段を転がるように降りて行った。ところが裏口を出たすぐの所で最後尾の栗田が床につんのめって転倒してしまい、彼1人が出遅れた格好となってしまった。必死で追い付こうとする栗田。しかし、彼らに追い付く事はできなかった。

今にも脚のもつれそうな栗田が3階まで降りて来た時、彼の携帯が突然着信を告げた。

「んわああ……！……何だ携帯か……！」

折り畳まれた携帯をゆつくりと開く栗田。

『んわああ……！……何だ携帯か……！』

そこには先程の栗田が動画で映し出されていた。その背後で例の少女が少しずつ近付いて来ている。恐る恐る振り返る栗田。その視線の先には、少女の姿が……。その瞬間、栗田の身体は金縛りに遭ったかのようになり、動く事ができなくなってしまった。少女の右手が栗田の視界を覆い尽くす。声にならない悲鳴が南高の校舎を揺るがした。

その悲鳴は1階に逃げて来たばかりの5人の耳にも届いた。階段を降りてすぐのここの近くには保健室と生徒会室がある。日記を持っていた青田は思わずそれを落としてしまった。日記が開く。日記はまた新たに更新されていた。

仕返し1人目

「栗田君は？」

長田が藤本に訊ねる。

「ちと見て来る」

そう言つて藤本は鍵を春川に下投げで放り投げた。

「これ生徒会室の鍵。隠れてろ」

そう言つや否や、藤本は階段を駆け上がつて行つてしまった。

「ちょ、ちよつと先輩！私も行つて来ますね」

小池が追い掛ける。長田、春川、青田の3人は生徒会室前に取り残される格好となつてしまった。

「行つちやつたねえ」

「でも生徒会室なら鍵が掛けられるし安全かも」

心持ち平静を取り戻し始めている長田と春川。春川が施錠を解くと、生徒会室内へは簡単に入る事ができた。最後尾の青田はその際周囲に妙な気配が感じられない事を確認、慎重に入つて行つた。

その頃3階では栗田捜しの続きが始まるうとしていた。

「あれ？佑介のだ」

3階へ上がつてすぐの所に栗田の携帯が落ちているのを発見した藤本は、早速それを手に持ち、開いてみた。栗田の動画が再生される。

「佑介は……？」

その時、どこからか誰かの足音が聞こえて来た。と同時に小池の全身が硬直してしまった。目を見開いたまま、口をわななかせている。視線の先にはあの男がいた。幸い2人の存在には気付いていな

いようなものゝこちらに近付いて来ている事だけは確かだ。小池は藤本から離れゝ一心不乱に階段を駆け上がって行った。

「バカ！逃げるなら下だろ！」

藤本はその後を追ってゝ一生懸命走って行った。

一方、生徒会室では居残り組の3人が話を交わしていた。室内には教室にあるような机と椅子が数多く置かれ、きちんと整列されている。部屋の南側にある出入口用ドアからすぐ近くに青田、青田から見てその右隣に長田、さらにその前に春川が立っているといった配置だ。

「ここで朝までいれば人が来て助かるかも……」

長田はその言葉を一言で言い切ると、春川の方へ数歩歩いた。

「今何時？」

春川が訊ねる。青田は制服のズボンの脇ポケットから携帯を取り出し、背面ディスプレイに目を落とした。

「……あれ？」

「どうしたの？」

青田が疑問の表情を示したのを長田は見逃さなかった。

「帰ろうとしたのって何時頃でしたっけ？」

青田は携帯をしまい、長田と春川の真後ろの黒板の上にある掛け時計を見ながら言った。2人が振り返り時計へと目を向ける。

「あつ……」

時計の針は7時半を差していた。鍵を探そうとしてから十分時間が経過したはずなのに。時計という時計全てが完全に機能を失っていた。

「何かホラー映画みたいですね……」

青田がさり気無くおどけてみせる。しばらくの間室内に沈黙が流れた。

「……そうそう、これ見て下さい」

気まずい空気を打ち破ったのは、青田本人だった。青田はふと思い出し、藤本から預かった日記を2人に披露した。無言で日記を読み進める2人。

「……どう思います？」

「……どうって……。何でこんなのが……」

長田は半ば放心状態と化している。

「……これって、あの赤い浴衣の娘の日記……かな？」

「俺もそう思っただんです……。それに気付いて藤本先輩が俺に渡したみたいで……」

春川の予測を青田が肯定する。春川は今度は日記の最後の文

「仕返し1人目」

に着目する。

「『仕返し1人』って……？」

「栗田君だよ！！だって悲鳴聞こえた時栗田君だけいなかったもん！！」

長田が即答した。しかし青田は首をかしげる。

「俺が図書館で見た時は書いてありませんでした……」

「さっき更新されたんだよ！きつと……」

「鏡！！鏡探してるんだから鏡見つければ帰れるんじゃない？！」

日記を読み返していた春川がひらめいた。

「でも10歳っていったら小学生じゃん！！そんなのここにある訳無いよ！！」

長田が懸命に否定する。

「あるからここにいないんじゃないの？」

それに対し春川は冷静に反論した。

「あ、あの鏡……」

「えッ？！」

ふと思いついた青田の記憶に2人が食い付いた。

「古い手鏡を乙原先生が放送室に持って来てました！……地学部がどうのこうのとか……」

「ひでのり！！！！」

2人は顔を見合わせ、落胆した。

「じゃ、放送室！放送室行こ！」

長田を先頭に、3人は生徒会室を後とした。

その瞬間、長田の携帯の着信音が鳴った。

携帯を開いてみる。

ディスプレイにはあの少女の画像が表示されていた。長田は驚きのあまり携帯を落としてしまった。その表情が強張^{こわば}っている。その瞬間、恐怖心に追い打ちを掛けるように階段の上の方から誰かの足音が聞こえてきた。見上げると、そこにはあの少女の姿。しかも階段を1段1段ゆっくりと降りて来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955b/>

徘徊

2010年11月2日02時56分発行